にわとりの飼育を通して、
子どもと保育者が共有していく経験を探る

5歳児ほし組担任　**小早川　周　子**

はじめに

日々子どもたちと接する中で、近年特に感じていることがある。それは、子どもたちは心ゆくまで遊びに没頭、遊びこむ生活をしているだろうかということである。

穏やかで一見大人びた子どもたちの様子、その一方で起伏に富んだ感動体験が乏しいのか、感情の波があまり見られなく、いろいろなことに対してあっさりとした感じ方、受けとめ方をする子どもが増えてきたように思う。これは現代の大人の姿にも言えることであろう。

幼稚園としての役割や保育者としての役割を考えた場合、子どもたちに「自ら体験し、心を動かしながら遊びこむ生活」をいかにして保障し、援助していくかが大切なことではないかと考えている。そのためにまず、園内の日常における子どもたちと自然環境とのかかわりを見直してみたいと思った。

附属幼稚園の独自の自然環境としては、多種多様な古い樹木、園歌の歌詞にもあるひょうたん池、園庭から続く広く静かな草地、そして、飼育しているにわとりが挙げられる。この中で特に私は、にわとりの飼育を通して子どもと保育者が共に経験し、響きあっていく生活に目を留め、その時期時期にふさわしい環境の構成とはどんなことだろうか、また保育者はどのような援助をしていくべきだろうかということについて考えてみたい。

Ⅰ、研究の内容

1、研究の視点

○にわとりの飼育やその時々の環境の変化に対して、子どもたちが友だちや保育者とどのように気持ちを共有し、主体的に考え、環境とかかわっていこうとするかを捉える。

2、研究の方法

○にわとりに関する様々な出来事や子どもたちのかかわり方に注視し、その時々の子どもの持つ心情を読み取っていく。

○子どもたち同士、また、子どもと保育者と思いや考えを伝え合い、呼応していく機会を大切にする。

○子どもが豊かに心を動かし、主体的に考え、環境とかかわっていこうとする姿を支えていくよう環境の構成や援助に努める。

○子どもと保育者と共有していく経験を学級便り等を通して保護者に発信し、理解や協力を求めたり、必要に応じて専門的な知識を持つ方（大学教官、獣医師の方）にも協力を依頼したりしながら、子どもたちの活動や経験を多面的に支えていくようにする。

Ⅱ　実践事例

《飼育しているにわとりの近年の状況や、子どもたちの実態》

４月当初、園で飼育しているにわとりの数は９羽（オス２羽、メス７羽）であった。穏やかな性格のにわとりが多いが、ここ２、３年の間なかなかひよこが育たないという状況がある。数羽孵っても死んでしまったり、メスが卵を産んでも温めなかったりする姿があり、年を追うごとに状況が悪くなっているようであった。そのためもあって、子どもたちのひよこの誕生に対する期待感も少しずつ薄くなっているように感じられた。

また、数人ではあるが、にわとりを自分の所有物のように扱っている印象を受ける子どもたちの姿も気になるところであった。にわとりを抱っこしたまま園庭を歩き、遊びの場に連れて行ったり、中には、自転車のカゴに入れてお散歩するような姿もあり、かわいがっているというより、自分の物のように接している様子が感じられた。

子どもたちがにわとりの飼育を通して、生き物が生きていくいろいろな姿に興味や関心を持ち、心を動かしながら自らかかわっていくと共に、命の尊さを知り、生命あるものに対して温かい心情を育んでいってほしいという願いを持った。

※以下、事例の中の幼児名は仮名とする。

事例１『にわとりがいなくなった！』

８／８夏休み中、担任が日直の時、飼育舎の掃除をしようと中に入ると、にわとりが３羽、イタチか何かの小動物に襲われた後であった。排水溝の蓋がこの日たまたま開いており、夜そこから侵入してきたのではないかと思われた。

９／３　2学期始業式の日の学級での集まりで

Ｔ　「幼稚園で何か変わったなあ、なんだか１学期と違うぞということはない？」

Ｃｍ「お部屋（の様子）が変わった」「お花が咲いた」「お庭がきれいになった」…

Ｔ　「幼稚園に住んでいるおともだちのこと、忘れていない？」

Ｃｍ「あっ、にわとり！」

れい「静かになった！」（立って飼育舎の方を見ながら）

ゆうき「声が聞こえない」（何人かの子どもが耳をすますような姿を見せる）

このことを確かめるためにみんなで飼育舎まで行ってみることにした。

Ｃｍ「あれ？５羽」「６羽だよ」「くろがもうひとついない！」

「前は８羽くらいいたのに」「９羽だよ」

（子どもたちがその状況を理解しようと真剣なまなざしになり、一人ひとりの声も大きくなってくる）

保育者が夏にあった出来事についてありのまま話す。（８／７、日直の先生がえさやりに来た時、１羽がいなくなっていたこと。鍵もかかっていて、網も異状なく、おかしいなと思いな

がらその日一日にわとりを外に出さなかったこと。次の日、私が来たらまた3羽いなくなっていたこと。羽根はたくさん落ちていたけれど、網を破ったりした後はなかったこと。考えられることをたくさん考えて、一つ思ったのが小さな排水溝。ここから、お腹をすかせた動物、イタチか何かが入って連れて出たのではないかということ。)

C　「もしかして飛んで逃げたかもしれない」
「僕たちがえさをやらなくて、悲しくなって飛んでった」
「さみしかったのかな？」
「イタチだったら許せない！」「ヘビかもしれんよ」…

《学級便りより9／10》（中略）その出来事があってからずっと排水溝にもいつも重しがしてあり、その後、異状は見られなくなりましたが、このことを2学期に子どもたちに伝えること、とても辛く思いました。生き物を守り、育てることの難しさもですが、やはりもう二度とこんなことが起こらないように、残った6羽の命を大事に育てていくことへ改めて子どもたちの気持ちを向けさせたいと思い、ありのままのことを話すことにしました。

《学級便りより9／17》野菜くずや貝殻、パンの耳、古米など、子どもたちに持たせてくださいまして、ありがとうございます。6羽のにわとりは毎日おいしそうに食べています。これからもえさになるものがありましたら、どうかよろしくお願いいたします。

考察1

今までにわとりに対しては、子どもにとって“園で一緒に暮らしているおともだち”という意識を我々大人も大事にし、子どもたちが生命あるにわとりを身近に感じ、ともだちのような愛情や愛着を自然に持たせていくことを願っていた。また、にわとりの温かさを肌で触れて子どもが気持ちをやわらげていったり、えさ作りが自分の居場所となり、安定した気持ちで他の園生活に向かっていけるということも子どもたちにとって大切な意味を持ち、価値づけていた。更に、にわとりの世話を通して友だちとのかかわりが生まれ、友だちとの一緒感、あるいはグループでの所属感を感じることもできた。

そのような良さもある一方で、にわとりを自分たちと共に遊ぶ存在として、つい自分の所有物のように扱ったりする姿もあったように思う。また、えさ作りを通して心を安定させて遊びや友だちの中へと向かっていくという良さはありながらも、一方で、えさ作りを途中でやめて行ってしまったり、どの位のえさが必要なのか、どのようなえさの与え方が大切なのかというようなことにあまり関心が行かず、自分中心のやり方に終始するという姿もあり、課題であったと思う。

夏休み中の予期せぬ出来事は子どもたちにとっても大事件であり、このこと以降、子どもた

ちのにわとりに向ける意識が少しずつ変わっていったように感じた。保育者自身もまた、にわとりたちを私たち人間がしっかりと守っていかなければならないないという思いを強く持った。保護者が毎日、子どもたちに野菜くず等、えさになるものを持たせくださり、子どもたちの意識や活動を後ろから支えてくださることもありがたかった。

事例２『ひよこが生まれた！声が聞こえるよ！』

９月中旬より、１羽のにわとりが卵を温め出し、日中もずっと座っているようになった。何人かの子どもはそんな母親鳥の変化に気付き、ひよこの誕生を心待ちにするようになった。10／15、子どもたちと一緒に小屋の中にそっと入ってみると、母親鳥のお腹の下からかすかな鳴き声が聞こえてきた。（誕生はおそらく10／12頃、５羽生まれた）

10／15　学級での集まりで

保育者「今日ビッグニュースがあったよね」

Ｃｍ　「ひよこが生まれたこと！」「ピヨピヨって」「黄色かった」「見てなーい」

しの　「黄色くってかわいくてね、卵みたいにね、かわいかった」

ようこ　「ちっちゃくて、かわいかった」

ゆうき　「卵とおんなじ大きさだった」

Ｔ　「春からずっとにわとりさん卵温めててね、なかなかひよこがかえらなかったでしょう」

Ｃ　「茶色いぶんは生まれたけど死んどった」

Ｔ　「卵の中でね、死んでたのもあったよね」

Ｃ　「卵が落ちてね…」

さや　「にわとりがね、３羽いなくなったこともあった」

Ｔ　「さやちゃんよく覚えてる。にわとりが３羽いなくなった事件もあったね。どうやったら、今生まれたひよこが大きく育つかな？」

Ｃ　「えさをいっぱいあげる」

れい　「ねー先生、あのね、けれどえさいっぱいあげたらお腹いっぱいになって死ぬかもしれん」

Ｃ　「違うよ、いっぱい食べたら、卵産まなくなる」

ゆうと　「あのねー、ほかの鳥に食べられないようにする。ワシとかカラスとか」

Ｔ　「カラスがいっぱい来たこともあったよね。じゃあ質問、にわとりのほかのにわとりも一緒に住まわせていいかな？」

Ｃ　「だめ、だめ。そしたらその卵とかひよこが踏まれてしまう」

Ｃ　「あのね、夜イタチとか出て…誰か順番にね、夜…（見るということ？）」

れい　「親のところに離れないようにする」

Ｔ　「そうだね、危険なことがあったら親がすぐに守らんとね」

C　「でもさ、もしもね、鳥がね…、落としたら…」
C　「部屋の中で飼ったら？」「いい考え」「かぎ閉める」
れい　「こうじくんがね、部屋で飼うって言ったよね、それだめだと思うよ、だってね…」
C　「息ができらんもん」「だってにわとりのお腹で温めんといけん」
T　「じゃあ、お母さんとひよこだけ部屋に住まわせる？」
C　「けれど違う親が来て、けんかすることもあるし…」
れい　「この間３匹死んだよね、あの時、ヘビだと思う」
Cm　「ヘビ？」「ヘビ？」
保育者　「じゃあ人間が気を付けることはないかな？」
C　「守ってあげる」
保育者　「守るってどういうことかな？よく、守ってあげるって言うよね」
C　「にわとりさんをつかまえないようにするの」
保育者　「わかった。いつもこうやって、おい、遊ぼうよってつかむこと？」
C　「うん、○くんいっぱいつかんでいるもん」「ギューはだめ」「見るのはいいよ」
こうじ　「にわとりとかひよことか大事にさせることがいいんじゃないかと思う」
C　「家に入れるって言ったよね、さやちゃんが。段ボール探して大きいのに入れたらどうかな」

この日、子どもたちが帰った後、できるだけ母親鳥が落ち着いて子育てが出来るようにと思い、にわとり小屋の中に簡易の小屋を作った。その小屋の周囲を段ボールやござで覆い、中にはわらを敷いて温かい環境を作った。

10／20

・朝からひよこの様子を気にして小屋の中をのぞく子ども

Cm　「つついてる、つついてる」「ひよこちゃんおはよ～」
「あ～今お腹の中に入っちゃった」「かわいいね～」（声をひそめて）
ゆみ　「えさ作りしたい、えさ作りしたい！」
C　「○ちゃん、一緒にえさ作りしよ」「先生、ほうちょう！」
いちご組のたかひこ、にわとりの様子をじっと見て、「おれんちに帰ったらママに言う」

・いつもより小さく野菜を切ってえさ作りをする子ども

T　「ちっちゃく切ったねー」
あきこ　「栄養たっぷり」「だっておいも入りだもん」

・テラスで、板や段ボールを使って『ひよこの遊び場』を作る子ども

きみこ　「わら、ここにやる」

ひろみ　「階段を作る。いっぱい（板を）切らんといけん」

まさひろ「ここ、マット敷かないといけん（すべり台の下）」

すべり台を作りながら「本当に登るかが問題…」

Tがわらを持って来る。

T　「これね、昨日のひよこのベッドの余りだよ。おんなじわらだよ」

まさひろ「ここらへんにわらやる。クッションみたいに。これツルツルすぎてシューっとなって、そこでね落ちたら痛くなるかもしれんけん、クッション敷いとく」

Tがわらを編むようにすると、まみが側に来て真似てやってみる。

ひろみ　「手が痛くなった。だって9個めだもん。…だってひよこのためだもん」

ひろと　「飾りも付ける」（クレパスを持ってくる）

れい　「土のほうがいいんじゃない？」れいとゆみは段ボールを探し、底にガムテープを貼り、土を入れる。そして、日光が当たる場所に持って行き、土を温める。

れい　「おれの土。土をマットがわりにしてー。せんせいの作ったこういうの（わらのマット）載せたりしてね…。ビニールはだめ。食べてしまうから」

「ねーねー、ひよこ、名前つけないといけないんじゃない？」

園庭でレストランごっこをしていた数人の女児が砂のごちそうをテラスに持って来る。

さきこ　「ハイ、これはせんせいたちのコーヒーです」

「プリン、これはみんなで配ってね」

堀江T　「ありがとう！おいし～。また元気パワーが出てきたぞー」

「子どものオレンジジュースここに置いとくけん、終わったら呼んでくださーい。終わったらあっちに運ぶけん。さよーならー」

じゅんじ「なんの騒ぎ？…にわとりの飼い方がわからん」（図鑑を持って来て調べる）

れい　「僕はわらは入れたくない。足が引っかかるから」

考察2

ひよこを発見した日は、待望の誕生に心から喜び、興奮した様子の子どもたちであった。「ひよこが卵とおんなじ大きさだった」という気付きからも、大人が思うよりもはるかに驚きを伴った出会いだったようだ。

「茶色い卵は生まれたけど死んでいた」「にわとりが3羽いなくなったこともあった」「ワシとかカラスとか他の鳥に食べられないようにする」等の言葉は、今までの生活の中で子どもたちが実際に見たり、聞いたりしたことであり、今回の出来事や学級での話し合いをきっかけにしてそれらが次々によみがえってきていることが分かった。今までの経験、一人ひとりが感じてきた思いや、友だちや保育者とその時々に共有してきた思いがあるからこそ、にわとりと

ひよこを守りたい、絶対に守らなければならないという強い意思が子どもたちの中に芽生えていったようである。

友だちや保育者と共有していった心情

9／3～	にわとりの数が少ない！	＜驚き＞
	イタチだったら許せない！	＜憤り＞
9月中旬～	ひよこの誕生、まだかな？	
	もうすぐ生まれそう。	＜期待＞
10／15～	生まれた！	
	小さくてかわいい	＜愛情、愛着＞
	とても弱々しい	＜心配＞
	元気に育ってほしい	＜願い＞

ひよこが誕生してから、子どもたちは今までとは明らかに意識が変わっていったようであり、それは具体的な姿となって表われていった。一人ひとりがその子らしく考えを持ち、行動していく姿、そして、友だちのしようとしていること（していること）を側で感じ合い、触発し合っていい考えは自分の中にも取り入れていこうとしている姿が感じられた。

学級で（学年で）共に考え、主体的に行動していこうとした意欲や態度

○ひよこが元気に育つためにはどうやったらいいのだろう。

○自分たちに何ができるだろう。（話し合いを通しての心情や意欲の高まり）

・危険から守る。・静かに子育てが出来る環境を作る。

・栄養のあるえさを与える。・にわとりをつかむことをやめる。等

○具体的に行動していこう。（態度）

・そっと優しく声をかけていく。・いつもより細かくえさを刻む。

・ひよこが喜ぶ遊び場を作る。・ひよこがけがをしないようにマットを作る。

・図鑑でひよこの飼い方について調べる。等

事例3『どうして死んでしまったの？』

ひよこは5羽生まれ、子どもたちと共に心を込めて世話をし、見守ってきたが、残念なことに次々と死んでいった。そのうちの1羽は1週間余り元気な姿を見せてくれたが、ついに日曜日の夜、死んでしまった。

10／22　学年で集まりを持つ。

保育者が見た日曜日のにわとりやひよこの様子をありのままに子どもたちに伝える。

C　「お母さんがあばれてばかりで、ひよこさんがいるところにね気が付かなくて、踏み

つけたんじゃない？」「ミミズがいたから、ひよこさんも食べたかったから、それでお母さんにわとりとけんかになったんじゃない？」…

保育者が状況を詳しく伝え、冷たくなったひよこを子どもたちに見せる。

C　「なんかこわい…」「さわってもいい？」「目があいてない」
「冷たくなってる」
「いっぺんにさわったらいけないよ、おれちゃうから」「ピヨちゃん…」
「死んでるみたい…」「口のとこもどこも冷たい」「かわいそう」
「動物の病院に行ってね、病気とか、けがとか治してもらう！」
「なんでけんかしたか聞く」

10／23　島根大学教育学部理科教育研究室の大谷修司先生に来ていただき、子どもたちの素直な疑問やにわとりの生態や飼い方などについて事実に基づいたことをお話してもらう機会を作る。

大谷先生　「幼稚園のにわとりさんはみんな年をとっていてね、卵を産んでもあまり栄養がないんだ。その卵がヒナになっても体が弱いんだよ。人間と違って年が分からないから難しい。それから、にわとりっていうのは、時々遠くに住んでいるにわとりを連れて来てやらないといけないんだよ。みんなは、ひよこが大きくなるように一生懸命いろいろなものを作ってあげたね。でも、今はとっても寒いでしょ。赤ちゃんはとっても寒がりなんだよ。みんな、ああやってくれたけど、もともと元気がなかったところに、この前雨が降ったこともいけなかったね。生まれたら、そう～っとしてあげて親がびっくりしないようにしたらいい。お母さん鳥があばれたのはね…赤ちゃん産んでも死んじゃったりして寂しかったかもしれない…。」

C　「どうして死んだの？」「どうしてにわとりのお母さんがあばれたの？」
「なんで遠くのにわとりって来ないとだめなの？」
「どうして目が開かないの？」「どうしてひよことか死んじゃうの？」…

その後、みんなでひよことお別れをし、みんなで木の根元に墓を作った。

考察 3

ひよこの死に直面し、私たちはこのことをどのように子どもたちに伝えたらよいだろうかと迷ったが、ありのままの状況を詳しく伝え、私たち自身もどうして死んでしまったかが分からず悲しくなったこと等を素直に伝えることが大事ではないかと思った。子どもたちが愛情を向けていたひよこと対面した時の気付きや表情はどれも真剣なものだった。しかし、死ということを受けとめることができず、希望を持っている子どもたちの姿を見ていると、死んでしまったと言うことはできず、子どもたちの考えから「動物の病院に連れて行って、なぜ動かな

くなってしまったかをお医者さんに聞く」ということになった。

子どもたちの思いに丁寧に応えていくことが大切であり、そのために、にわとりの生態や飼い方等について詳しく知っておられる方に来ていただきたいと思い、日常的に園に来ていただいていた大谷先生に相談した。そして、翌日来ていただくことにした。

子どもたちは大谷先生からのお話を真剣なまなざしで聞いていたが、なかなか納得しきれないでいた子どもの心情も感じられた。

子どもたちがひよこの死を受けとめていくまでの過程で大切だと感じた援助

○保育者が見たありのままの事実や、感じた素直な気持ちを子どもに伝える。

○子ども自身が感じ、表わしていく姿（驚き、疑問、恐れ、悲しみ等の表現）を待ち、共感的に受けとめ、呼応していく。

○子どもの考えを大切にしていく。（「動物のお医者さんに診てもらいたい」）

○いろいろなことがらの意味についてより深く知りたいという子どもの欲求を受けとめ、応えていく。

○子どもたちが気持ちを寄せていったひよこに対して、きちんとお別れをする。

事例４その後の生活の中で

ひよこの誕生、そして死を間近に体験し、心を大きく揺さぶられた子どもたちは、その後の生活の中で以前とは違った姿を見せるようになった。

○大谷先生に教えてもらったことを受けとめ、人工的に温めて卵が孵るのを待つ子どもの姿。

（孵卵器に入れる等して、親鳥ではなく人間の手によって卵を温めることにより、卵が孵ることがあるという話を聞いたつき組の子どもたちは、ダンボールやストーブ、カイロ等を使って卵を人工的に孵すことを試みてみる。）

○にわとりに対して思いやりを持って接していく子どもの姿。

社団法人東京都獣医師会のホームページ「望ましい動物飼育のあり方」に、次のような言葉が載せられている。

『小さな動物たちにとっては、子どもたちが大きなライオンに見えることでしょう。子どもたちが“優しいライオン”になっていただくことが第一の目標としたいものです。』

この言葉が強く印象に残り、学級の子どもたちに対してもいろいろな機会に“優しいライオンさんになりたいね”と話してきた。

ひよこの死の後、子どもたちはにわとりに対して少し距離を置いたかのように、遊びに没頭する姿も見られた。また、にわとりをむやみに抱いたりする姿が急激に減ってきた。しかし、遊びの合い間合い間にふっとにわとりの様子を見に行き、手にえさを直接乗せてしゃがみ、それを静かに静かににわとりの口元に持っていく子どもたちの姿が見られるようになった。

○子どもたちの経験を通して、保護者に伝わっていったこと。

《保護者からの便りより》先日、ひよこが生まれた生まれたと大喜びでした。「小さくて静かにしてなきゃ！ミミズとか食べるんだよ！かわいい声で鳴くんだよ！」と3、4日位ひよこのことばかり言っていました。残念なことにひよこは死んでしまったんですね。「全然動かなくなったの。埋めてあげたの。にわとりたちが大騒ぎしてつぶされたのかな…」ととても悲しそうでした。死んでしまったということと、動かなくなるということが、なにか自分の中で分かってきたという感じを受けました。とても大切なことを学んだような気がします。このことがこれから生きてくるでしょう。

《保護者からの便りより》子どもたちもこうして、生命って本当に大切なんだ、生きるっていうことは難しいけれど、だから余計に素晴らしいものということを少しずつ肌で感じ取ってくれたように思います。

○　飼育当番引き継ぎ活動を通して、子どもたちが年中児に伝えようとしていったこと。

2／21　学年で集まりを持つ。

２月下旬より飼育当番に年中児も加わり、年長児から年中児へとにわとりのお世話を引き継いでいく。それに先立って学年で集まりを持ち、年中さんたちに教えてあげたいこと、伝えたいことを話し合った。

ひろと　「ひよこさんを温めてあげる」
もえ　　「えさをちっちゃく切ってあげる」
かずき　「あのね、にわとりにごはん忘れずに」
たいち　「にわとりを抱いてもいいけどね、放すときにね投げないこと」
しの　　「貝をね、こなになるまでコンコンする」
もえ　　「こなになるまで、こうやって…」（手をかなづちに見立てて貝を砕く動作をする）
まさひろ「包丁のやり方、お手本見せてあげる」
じゅんじ「水が流れる場所もちゃんと掃除する」
こうじ　「たまごとにわとりさんを守ること」…

このような思いを翌日、年中・年長合同の集会で子どもたちは伝えていった。

実際の活動の中では、年中児が包丁を握る手に自分の手を添えながら優しく見守る子どもや、かなづちを振り上げるようにして貝を叩いている年中児に対して「ゆっくりしてごらん」と声をかけながら小さい動作で砕いていく姿を見せる子ども、年中児が切った大きいパンのかけらを手でもんで小さくしていく子ども、手のひらにえさを載せてそっとにわとりの口元に持っていく年長児の姿を真似して同じ動作をやってみようとする年中児の姿等が見られた。

考察 4

ひよこに関わった子どもたちの経験については、学級便り等を通じて保護者にも発信したが、保護者は“生命”ということや“生きていくということ”について、これから長い人生を歩んでいく我が子に向けて親としての思いを寄せ、受けとめてくださったことに胸を打った。

初冬になり寒さが増してきた頃、子どもたちは再びにわとりのお世話に意欲的に向かうようになった。子どもたち自身が肌で寒さを感じていくことは、にわとりの冬の暮らしにも自然に思いをはせていくことにつながり、思いやりの心情も増してきたようであった。

引き継ぎ活動に向けての話し合いの中では、次ににわとりのことを任せる年中児たちに伝えていきたいことがたくさんあること、そしてそれは子どもたちの実際の経験から生み出された思いであることを受けとめた。また、年長組での集まりの中ではどちらかというと“お世話の仕方”について教えてあげたいことが多かったが、年中児との合同の集まりで実際に言葉で伝えたことは、“にわとりへの思い”の方が強かったことが感じられた。

Ⅲ　おわりに

＜子どもと保育者が共有していく経験を通して大切だと実感していること＞

＊園（独自）の環境を子どもにとって生きたもの、意味のあるものにしていくこと。

園の環境を子どもにとって本当に生きたものにしていくためには、保育者がそれについて興味を持ち、よく知ろうとすること、おもしろいと感じて向き合い、自分自身が体験していくことが第一歩であると思う。このことが土台となって初めて、子どもたちに対しても私たちは実感を持って語ることができるし、子どもたちが興味関心を向けていくきっかけにもつなげていくことになるのではないだろうか。

＊子どもたちがいろいろな気付きを表わし、学級の友だちや保育者と伝え合ったり、共感したりしていく経験。

子どもたちがいろいろなことに気付きながら環境と向き合っていく姿をしっかりと共感しながら支え、共に気付いたり、疑問を持ったりしていく保育者の姿勢がとても大切だと感じた。子どもたち一人ひとりの気付きや実感を大切にしていくこと、そして、それを学級の友だちや保育者と伝え合う中で、子どもたちは友だち一人ひとりの感じ方の違いを知っていく。

10月には島根大学の大谷修司先生、２月には獣医師の田原研司先生に来園していただき、アドバイスをいただいたが、子どもたいと創り出す生活をいろいろな専門の方にも協力を得ながら多面的に支えていくこと、子どもたちの“もっとよく知りたい”という願いにしっかりと応えていくことも大切なことだと感じた。

＊自然の奥深さ、生命の持つ力強さ、不思議さ、尊さ。

自然は、私たち保育者の説明では不十分なほど不思議をいっぱい持っている。生きものの命は自分たちの思う通り、願う通りにならないこともあるけれど、小さな命であっても必死に生きようとする力が備わっていること、我々人間が責任を持って飼育することの大切さを、今回改めて子どもたちと共に感じることができた。

保育や教育の現場で小動物を飼育することによって、子どもたちは人の命以外にも命の存在を知り、肌で触れ合い、誕生や死にめぐり合っていく。このような経験を通して子どもたちは、弱い立場の命を慈しむという気持ちを育んでいくのだと思う。その気持ちは自分自身の人格形成の上でも、そして、人と人との関係の中にもきっと生かされていくと思うし、そうであってほしいと願う。

また、自然と向き合うと正解は一つではないからこそ、子どもたちは大人以上に非常に豊かな想像力、感性で気付きを表わすことができると感じた。

今後も様々な生活の中で、子どもと保育者がどのような経験を共有し、響きあう生活を創っていくことができるか、子どもたち自らが考え、環境とかかわっていこうとする姿をどのように　支えていけばよいかについて考えながら保育に向かっていきたいと思う。